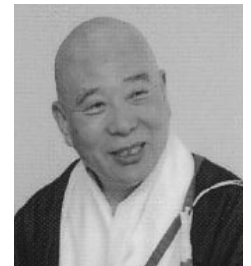


《2010年度 ICD 日本部会・総会・認証式特別講演》

歴史から学ぶ日本のこころ

薬師寺管主

山田法胤



●抄録●

心というものは分かっているようで、実は分かりにくいところがたくさんあります。仏教では、心のことを命の根っこ書いて、命根（みょうこん）と呼んでいます。もうひとつ「間断（けんだん）」という持続性がないものも心とっています。

われわれは心が持続して充実した生活が出来ているかという、意外と“間断”しています。私たちは意識があろうとなかろうと、ずっと体験をしてきています。その体験を「認識」と言い、無尽蔵に体に蓄えています。これを仏教では「熏習（くんじゅう）」と言います。

日本は鎖国をしている間、物質文明では遅れたけれど、その1000年の歴史を通して、まじめにこつこつと造り上げてきた稲作文化という日本の熏習で人間性をつくっていったのです。

それは外国文化に決して負けないものでありましたが、敗戦後はそういう日本の心をすっかり見失っているのです。

奈良時代では、日本人は日本の心として、お互いがお互いの痛みを感じ、みんなで支えていこうとしておりました。だからこそ、日本が幸せな国になるためなら、命を捧げてもいいと思ったのです。

仏教の教えはまず人間の心を育てるということです。私たち人間がよくなるために、日本の国がよくなるためには、日本人の心を豊かにして、そういう幸せを求める心にはしていかなければならないと思っています。

キーワード：心、仏教、豊かさ、国家

かたよらない心、こだわらない心、とらわれない心、広く、広く、もっと広く。これが般若心経、空の心なり。仏法はまるい心の教えなり。仏法は明るい心の教えなり。仏法はおかげさまなる心の教えなり。仏法は一切皆苦の教えなり。

ちょうど奈良は今年、平城遷都1300年という、節目の年でございます。この平成の御代まで二千数百年の歴史を持った国というのは、世界でも類がないのではないかと私は思っています。

ローマやイギリスなどヨーロッパの国々、またエジプトなど、これらの国々では王様が代わり、民族が変

わると文化は続いているのであります。ところが、日本の天皇というものは、初代天皇の神武天皇から今日まで変わることなく、一系できています。こういう国家は他には在りません。

現在の天皇は125代目で、今日、私がお話しさせてもらうのは大体40代目前後の天皇が、日本の国づくりをされていた頃です。特に奈良というとき様は大仏を思い浮かべられると思いますが、その大仏を建立する詔を出した天皇は45代目の聖武天皇でございます。

今、日本の心というものはどんなものかということで、今日の演題を「歴史から学ぶ日本のこころ」としたのですが、心というものは分かっているようで、実

は分かりにくいところがたくさんあります。

仏教では、この心のことを命の根っこ書いて「命根」と呼んでいます。それが肉体を保ち心を保っているから心臓が大体心だと、こういうふうには言っているのですが、仏教ではもう1つ心があります。これはどんな心かという、「間断（けんだん）」というふうには書いてあるのです。「間（けん）」という字と、途絶えるという字。こういう心だということです。だから、持続性がない心なのです。

この心を私たちはどう調整していくかという、ここに志という、意思というものが働くわけです。これをどれだけ整えていくかというのが「日本の心」になり、「国の心」になり、「時代の心」になっていくと言われていますから、ここが最も大事なところなのです。

この心が物に左右されたり、動いていくのです。どんどんものが豊かになり、経済が発展し、合理主義になってくると、便利を追求して行けば行くほど、この心は緩慢になって、愚かになっていくというところが、気付いていなかった部分なのです。

ヨーロッパでは、合理主義というのはすごく素晴らしいものだとすることで発展させてきました。けれども、日本人というのは、そういう合理主義ではなく、勤勉で同じことを繰り返していくという生活を持ち続けてきました。

894年までおよそ300年近く、日本は遣隋使を始めとして世界の文化と交流していました。私たちは昔、これを東西文化交流と呼んでいました。ところが近年はそういう言葉を使わないで、シルクロードと呼びますね。

中国で602年に生まれた玄奘三蔵法師という偉いお坊さんがおりました。この方は「西遊記」の三蔵法師のモデルになった方で、実在の方です。この玄奘三蔵は17年の歳月を費やしてインドへ行き、その間のことを『大唐西域記』12巻という本に記しました。

その玄奘三蔵さんの頭のお骨が7等分されて日本へ来ているのです。その7等分のうちの2分の1が薬師寺の玄奘塔というところに祀ってあります。だから薬師寺は、玄奘三蔵の教えを受け継いだ寺なのでございます。

その玄奘三蔵は「心」というものを勉強しました。

それは唯識教学という学問なのであります。法相宗はこの学問を教えとしています。

われわれは心が持続して充実した生活が出来ているかという、意外と“間断”しているのです。それを“無意識”という言葉で呼ぶのですが、皆さんは生きるという意思がないのに生きている。生きようとする意思がないのに心がずっと持続している。その心のことをインドでは「アーラーヤ」といい、無尽蔵を意味するのです。

私たちは生まれたときから今日まで、意識があろうとなかろうと、ずっと体験をしてきています。その体験を「認識」と言ひまして、意識があろうとなかろうと体験したものを無尽蔵に体に蓄えています。これを仏教では「熏習（くんじゅう）」と言ひます。

皆さんは意識があろうとなかろうとこの熏習されたものが入ってくる。意思を持って聞くのではなく、無意識で聞けば良いとか悪いとか判断しないで聞きますから、一番正しく心の中に入るのです。ところが自分の心で世界を判断して聞くと正しく伝わらない。これが「阿頼耶識（あらやしき）」というもので難儀なのです。正しく伝わらない。ここのところはなかなか難しいところなのです。聞いている体験と認識が違つと、すべてのものが違って聞こえてしまうので、これが私たち人間の難儀なところなのです。

ですから、この心というものは自分の都合の良い方へ、都合の良い方へ解釈してしまうのです。それを合理主義でどんどん楽な方へ、楽な方へと、今の日本人は国が全てを与えてくれるように思い込んでしまつて、学校の授業料も、子育ての費用も、みんなくれるのだと思つてくると、国のことなんか何も考えない。そして自分のところへ嫌なものがあるのは反対となつてきたら、日本という国はどんな国になっていくのかすら分からなくなつてくるわけです。

奈良時代の聖徳太子以来、45代目の聖武天皇のころは、一生懸命世界の文化を受け入れ、世界の文化に近づくといいよりも、中国や周りの国に負けないような文化を持たないと、対等な文化交流ができないから、法隆寺や薬師寺や東大寺を建立して、どんどんどんどん文化を高めていった。そういうことで日本の評価が上がつてくるのであります。こういうことを抑止力と

申します。

武器や爆弾や原子力を持つことが抑止力と今の世界は言っていますが、奈良時代はそんなものじゃなしに、文化の高い国、そして教養のある国家ということが、抑止力だったのであります。

日本は894年に遣唐使を廃止して以来、1852年、ペリーが浦賀へ黒船でやって来るまで、およそ1000年近く鎖国をしていました。そして国を開いてみたら、日本は100年、いや150年遅れていると受け取ってしまったのですがそれは間違いだったのです。

確かに物質文明や医学の世界では遅れていたけれども、日本はその間に1000年の歴史を通して、まじめにこつこつと造り上げてきた稲作文化という日本の熏習で人間性をつくっていったのです。

ですから、ヨーロッパの文化、アメリカの文化に負けない、それを吸収できる人材と、日本人としての心を持っていたことを忘れて、自分たちが劣っているという見方を明治、大正、昭和としてきたため、太平洋戦争へぶつかり、そして敗戦を喫したのです。そして65年たった今、日本人はどうなったかといったら、世界のどの国よりも合理主義で、どの国よりもヨーロッパ主義で、アメリカ主義で、今、日本の若者たちは日本人としての心を失って、自分たちが今、どうしたらいいかをすっかり見失っているのです。私たちはこういう現状こそが、これから解決しなければならない課題だと思っています。

最勝の国を治める王たる者はどうすべきかと言ったお経があるのです。45代目の聖武天皇はそのお経に従って、私はそういう国をつくりたいと言っています。仏教では人ばかりでなく、草木国土まで生きるものと教えています。ですから、一切衆生、生きとし生けるもの、隅々まで命あるものが幸せになることを王はやるべきだと書いてあるのです。

では、幸せとはどんなことでしょうか。私たちはどこかで物が豊かであれば幸せだと思っているけれど違うのです。お経の中にどうあるかといえば、飢え死にしない国家をつくることだと書いてあるのです。

そう考えれば、日本は確かに飢え死にしない国家。これを王たる天皇はずっと守ってきたのです。敗戦時、

天皇がマッカーサーに会いに行った話は有名じゃありませんか。天皇が財産目録を持って、マッカーサーのところに行って、私の財産はこれだけだけれど、今、日本は食糧難で飢え死にする人が出ている。これだけは避けてもらいたいと。どうぞ私の財産は全部そちらに使ってもらってもいいから、飢え死にさせない統治国家をつくって欲しいと頼んだのを聞いて、マッカーサーは大変驚いたのです。命乞いに来たのだらうと思っていたのに、国民が飢え死にしないことを願ったというのを聞いて、マッカーサーは感動し、アメリカから飢えをしのぐための脱脂粉乳を送り込んでくれたのでした。

今、日本は普天間の基地で揉めていますが、軍備を持たない法律を作ったのだから誰かに守ってもらわねば仕方なかった。アメリカ軍の抑止力に守られてきたにもかかわらず、日本は基地がなくても良いと言い始めている。それを反対する気持ちは分からないことはないけれども、どこかで誰かが痛みを感じるって大事なことじゃないですか。

日本人は日本の心として、痛みを共有し、みんなで支えていこうということを奈良時代はやっていたのです。それがよく分かるのは大仏建立の時です。大仏を建立する意味は、聖武天皇は民を飢え死にさせないようそういう慈悲を隅々まで行き届かせるために国分寺を造ろうというので、67都道府県に国分寺を造ったのです。その国分寺の総括として、慈悲の心が行き届く仏を都に造ろう、太陽の光がすべてに行き渡るように、大きな大仏を造って、私の足りないところは仏の慈悲で、飢え死にするようなことのない国家をつくり上げたいという、そういう気持ちがあったのです。そういう気持ちだったから、みんなで応援しようというので、行基菩薩という人が、多くの恵まれない人たちや、地方の人たちに道路を造り、池を掘って灌漑用水をつくるなど、いろんなことをやっていたのです。そして大仏が749年に完成したのです。

大仏が完成した時に、大伴家持が、「海ゆかば 水漬く屍 山ゆかば 草生す屍 大君の 辺にこそ死なめ かへりみはせじ」という歌を詠みました。大君のために、国のために、私たちが海で活躍して、命を落とすようなことがあっても、国が立派になるのであれ

ば命を捧げても惜しくない。草生す屍、山で私が仕事をしていて、命を落とすようなことがあっても、それが御国のためになるのなら、喜んで命を捧げる。これが「海ゆかば」という歌です。

明治の時に軍隊が作曲したから、軍歌の一部になってしまったけれど、戦争の歌とは違って、日本が幸せな良い国になるためだったら、私たちは命を捧げてもいいという、そういう意味の歌だったのです。

やっぱり心が大事だということから、仏教の教えは唯識教学。まず人間の心を育てないといけないというので、識のみと。私たち人間がよくなるために、日本の国が良くなるためには、日本人の心を豊かにして、そういう幸せを求める心にはしていかなければなりません。物だけ求めていれば、物が豊かになって、幸せになっている筈なのに、1年に3万人も自殺で死ぬなんて、それは心の豊かさを間違えているからなのです。

最後にもう1つだけ、私は形見とか遺産には、小さい遺産と大きい遺産があると思うのですが、小さい遺産は喧嘩の種になるから捨てたほうがいいと思います。

では、大きい形見とはどんなものかと言ったら、江戸時代に良寛さんがこんな歌を詠んでいます。「形見とて 何か残さん 春は花 山ほととぎす 秋はもみぢ葉」。鎌倉時代の道元禅師が詠んだ歌は、「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷しかりけり」というものですが、今、一番大事なのは、2000年も残してくれた日本という世界に類のない天皇制の国家な

のです。そしてそれは春には花が百花繚乱に咲いて、夏にはほととぎすが飛んで青々とした緑があり、秋になったら、紅葉がきれいで、月が冴え渡り、冬になったら、雪がきっちり降る。こんな四季のある国を私たちは未来の人に残しておかなければならないと思います。私はこれこそが一番大きい形見だと思うのです。

日本が5年前に出した愛知万博のテーマは知っていますか？「愛・地球博」というのですが、その時に「自然の叡智」と言っているのです。「自然の叡智」って分かりますか？「叡」という字は自然の優れた知恵、要するに深遠なる道理にかなった知恵のことです。

40年前にあった大阪万博でのテーマは、「人類の進歩と調和」と言っていたのです。

今は進歩と調和が狂っている。でも、40年前に日本はそういうことに気付いているのです。ですから、もっとやるべきことがあるように思います。

戦後は焼け野原で物は何もなかったけれど、その時の子供たちの顔の表情は生き生きしていました。着ているものはボロですが、目に輝きがあります。今の中学生、高校生は目が死んでいます。良い物を着ている割には、1つも感動を覚えない。そう思うと、私たちは、物も大事だけれど、そういう日本の心というものをもう一遍、蘇らせていくことが大事なのではないかと思うのです。

私が思っている日本の心というものを少しでもご理解いただけましたら幸いです。

The Japanese Mind Learned from History

Chief Priest, Yakushi-ji Temple

Hoin YAMADA

We usually feel we understand our mind, but actually there are many confusing aspects to it.

Buddhism, other than calling mind “myokon,” literally meaning “root of life,” interprets it as “kendan” or something lacking continuousness.

We are unexpectedly in the state of “kendan” regarding our question about whether or not we can realize a fulfilling life with a continuous mind. We have all the while continued to experience something with or without consciousness in our daily life. We call such experiences “cognition,” as a whole, storing it in our “mind” unlimitedly. In Buddhist terms it is named “kunju” or second nature.

Although Japan lagged behind in the progress of a materialistic civilization while it was maintaining an isolated policy, we gradually shaped a unique humanity with our own “kunju” or second nature of a longstanding and industrious culture of rice cultivation in a history of more than one thousand years.

But despite the fact that our culture never yielded to other cultures in the world, we have completely lost sight of such Japanese mind after defeat in the war.

As was the case in the Nara period, for example, Japanese people tried to support one another in feeling mutual pain on the basis of the Japanese mind. Therefore they equally thought they were ready to sacrifice themselves just to make Japan a happy country.

The teaching of Buddhism is, above all, for the nurturing of the human mind. I believe that for the purpose of enhancing human beings and improving the Japanese nation it needs to enrich the Japanese mind leading to a mind aspiring for happiness of people.

Key words : Mind, Buddhism, Affluence, Country